立教英国学院通信

第二六八号　二〇一四年十二月十二日
発行者　立教英国学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK　RH12 3BE
http://www.rikkyo.co.uk

第４回

チャプレンより

林チャプレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業にはさまざまなお話をしてくださいます。

「待つこと」

チャプレン　司祭　林　和広

今夏より、妻が里帰り出産をすることになり英国での単身赴任生活を送っています。当初は英国での出産を予定しておりましたが、出産までに種々の検査や準備をする必要があると診断され、家族で話し合った結果、日本に帰国をして日本の医療のお世話になることになりました。先月、予定よりも約一ヶ月早く次男が誕生、これまでの色々なことを想い起こしながら今回の学院通信の原稿を書いております。

十二月に入り、クリスマスを待ち望む時期に入りました。キリスト教では十二月二十五日のクリスマスの四週間前より「アドヴェント」という期間を大切にします。アドヴェントとは「到来」という意味を持ちます。イエス・キリストがこの世界に生まれたことを喜び祝う日に向けて、希望を持って「待つ」ことを大切にします。今日の世界はかなり早い時期からイルミネーションで光り輝き、クリスマス商戦で賑わい、既にクリスマスが来たかのような空気になっておりますが、教会ではその喜びの日までじっくりと「待つ」ことを大切にしています。

現代人にとって「待つ」ということはあまり歓迎されることではありません。いかに迅速に対応するかということが求められます。利便性や迅速さを求める人間に対応するサービスはますます発展し、私たちを取り巻く環境はスピード感に溢れています。高い技術力の恩恵によって私たちの生活は便利で豊かになりました。ですが、わたしたちの生活は豊かになったと同時に、何か大切なものを見失いつつあるようにも感じます。

今回、三人目の子供の誕生は、遠く離れた英国で生活をしていることもあり、日本に住んでいる身内に全てを委ねて待つことになりました。色々なことに迅速性を求める現代人ではありますが、生まれてくる幼子は適切な期間を母親の胎内で過ごさなければ色々な影響を及ぼすことになるのでじっくりと待ち、養われる必要があります。どんなに医学が進歩し、生まれてくる予定日が算出出来ても、常にその通りになるとは限りません。人間の手で全てコントロールすることは出来ないということです。胎内の子の状態も医療技術の向上によりある程度把握することができても、最終的にはその子が産まれてこなければ分からないのです。

人間の領域を超えたものがそこにあり、そのことを受け入れ、じっくりと待つことを改めて気づかされることになりました。不安や焦りを感じつつも、希望を持って待つということの大切さを再確認することができました。

子供たちの教育や関わり方も同じようなことが言えます。五歳と二歳の子供もわずか数カ月離れているだけですが、変化や成長を感じます。色々なアドバイスやふれあいを通して子供は成長していくわけですが、自分の思い通りにはいきません。「もっと早く吸収して欲しい」、「なんですぐに出来ない？」と思ってしまうこともありますが、そこでもじっくりと待つ必要があるということに気づかされます。

もうすぐクリスマスです。神様からの贈り物であるイエス・キリストの恵みが皆様の上に豊かに注がれますようにお祈りしております。

－目次－

	ページ
第４回　チャプレンより	１
オープンデイ	２～３
サイエンス・ワークショップ	４～５
アウティング	６～７
現地校との短期交換留学体験	８
スカウト隊がやってきた！	９
立教生の夏休み	１０
教科レポート	１１～１２
＊コラム＊	
りんごのおまつり、アップルデイ	９
２学期　終業礼拝	１２

十一月二日はオープンデイ。学校外からお客様をお招きし、Rikkyo School を知っていただく、立教の一年間で最も大きなイベントです。生徒たちは、この一日の為に、一学期や夏休みから構想を練り、何度も話し合いを重ね、そして当日一週間前からは朝から晩まで一日中を準備に費やします。天候はあいにく雨でのスタートでしたが、今年も近隣に住む英人の方々を中心に多くの方にご来場いただき、校内は大賑わいでした。バザーや古本市をはじめ、和菓子、焼き鳥、手作りパンなどのキッチンや店舗を支えていたのは保護者の方々と高校三年生です。高校三年生は、短い期間で店舗の設営をしてくれました。忙しい中本当にお疲れ様でした。

サボリ

中一　鮒田　忠治

お～。手を止めて中一の教室を見渡した。そこはいつものようなあの殺風景ないすと机だけの世界ではなくて、まるで絵本の中に入ったようなあざやかな魔法の世界のようだった。

みんなで力を合わせてやったクラス企画、それは決してすぐ出来る物ではないということはわかっている。実質、僕だって頭がいたかったし、鼻血も出た。けど、もっと頑張れるような気がしてしょうがなかった。物足りないような、心のざわざわがおさまらない。そこには後悔もあったと思う。もっとがんばれたはずなのに、サボってしまった自分がいた。このクラスは僕に、もっときれいにしてと叫んでいたのだ。もしかしたら、僕がこの教室にかけたのは、魔法ではなくて、呪いだったのかもしれないと思うと、現実が怖くて、現実から逃げたくて、でも逃げられなくて、心が力士にのられたみたいにペチャンコになってなにも言葉が出なかった。

クラス企画は、そのクラスを表しているとよく耳にするが、それは本当のことだと思った。がんばればがんばるほどすてきな物になる。みんながオープンデイという名前の一日のために、頑張って教室に魔法をかける。一人ひとりががんばれば、それはとてもすごいものになるが、毎日のつらい作業から逃げてしまう人がいれば、とてもショボイものとなってしまう。それはまるで子供のようなものだと思う。今回のオープンデイは僕に大切なことを教えてくれたと思う。人間はどこで、誰から「サボリ」というものを教えられたのだろうか？

オープンデイを終えて

中三　櫻澤　菜奈子

昨年までは、金子先生に頼ってばかりで、あまり私たちで仕上げた！という感じではなかった。文章も書かなかったし、模型も作らなかった。だから、正直今回も不安でいっぱいだった。中学最後のオープンデイとして、中三全員の力を出し切って、賞はもらえなくても、後悔がないものにしたかった。

一学期にテーマを決め、休み中には資料を集め、二学期が始まってそれをまとめた。しめ切りなどは守れなかったものもあったけど、あきらめずにみんなが自分の時間を割いて頑張った。今回のテーマは「東日本大震災」。テーマが重く、難しいため、資料を読むだけで苦労した。私たちが知らないこともあり、もう一度、考え直し、そして理解し直した。とくに私が今回頑張ったのは日本語でまとめられた文章を英語に訳す「英訳係」だった。日本語でもわからない言葉を英語にするのはとても大変だった。また、日本語原稿が十枚あり、その十枚全てを私が訳すと思うとやる気は全く出なかった。しかし、こんなところで無理なんて言っていたら話にならない！と自分を説得し、頑張った。もちろん、すらすらとうまくいったわけではなく、途中、涙が出てきた時もあったが、何とか乗り越え完成した。あきらめないでよかった。そう強く思った瞬間だった。

発表されるまでのドラムロールの間、高二以下の生徒の両手はかたく結ばれ、みな下を向き目をつむっている。何かを願うように。結果、模造紙部門第一位は中学部三年。また涙が出た。しかし、この涙は嬉しい涙だった。みんなで喜んで泣いた。本当にうれしかった。また、その後のインパクト賞でも第二位を取ることができた。

オープンデイ前日の土曜日の夜、私たち全員が力を出し切って作り上げた教室を見渡し、「おやすみなさい！」と教室を出ていくときの顔はみんな笑顔にあふれていた。

きっと私だけではなく他にも辛いことがあり悲しくなった人もいたと思う。でもそんな時支えてくれるのが同じクラスの仲間。お互いがお互いを支え合い最後は笑顔になれた中学生最後の最高のオープンデイだった。同じメンバーでオープンデイの作業をするのは最初で最後だったと思う。

本当にうれしかった。みんな、ありがとう。来年ももっと成長できるといいな。

深まる絆

高一―一　中村　紫媛

「はぁ。オープンデイかぁ。ついにこの時期が来ちゃったよ。」

私の周りの人が言っていた。正直私もその中の一人だ。私は別にオープンデイが嫌いなわけではない。しかし、私の場合友だちとの関係が悪くなってしまうことも多い。毎年毎年、「おまえはオープンデイになると怒る。笑わなくなる。」と言われる。自分自身は、オープンデイに熱を入れるつもりはない。けれど、期間に入ると、みんながだらだらしているとビシッと言いたくなってしまう。きっとそれは昔、ある子にしごかれたからだろう。

中一の頃のオープンデイ、正直あれはつらい思い出だ。模型は一つしかない。その一つは私とその子で三日で作り上げた。ブレイク時間もなし。ココアもクッキーも食べられない。ひたすら作り上げる作業だった。あの過酷な状況を経験したため、その名残がまだあるのだろう。過酷なオープンデイが私にとって初めてのオープンデイだったためにそれに慣れたのだろう。

今年もやはり言われてしまった。だがその言葉を気にしていたら、前には進めない。もし友だち関係が壊れてしまったら、私がその子に合わなかったんだと思うようにしている。しかし実際、オープンデイという短い期間だけ少し壊れるだけで、終わったらすぐ仲良くなる。オープンデイという高い壁を越えて、友情はもっと厚くなるのかな。良いものを作るためには、自分の意見を中にしまっておかずにぶつかり合った方がいいと私は考えている。

今回のオープンデイは私にとって四度目だ。たくさん失敗もしてきた。たくさん辛いこともした。けれどその分、貴重な体験をした。今回、クラス内でもめごとはなかった。それでそれなりに良い物を作れたから、自分の中での点数は高い。クオリティ自体はどれも低かったかもしれない。それでも楽しめたから良いと思う。

同じクラスでもあまり話したことがない人もいたが、活動がきっかけで話すようになった子もいる。今まで話したことがなかった人は、今まで見られなかった部分を見ることができる。それがオープンデイの醍醐味でもあるのかなと思う。高一のオープンデイは私にとって味があり、お互いの絆が深まった。次のオープンデイでクラス企画は最後になる。四回分の失敗と成功をうまく使い、今まで見たことがないくらい良いものを作りたいと思う。

オープンデイ

高二―一　白井　千晴

今回のオープンデイでクラス企画は最後だということを念頭に置いて私は夏休み前のクラスの話し合いに参加しました。話し合いではクラス企画ができる最高学年としてお客様たちの印象に残るような奥の深いテーマがいいという意見が多数派で、「愛と生命について」という高二らしいテーマになりました。

「愛と生命」というテーマが少し広すぎるため、私たちは内容を「脳死について」「なぜ人を殺してはいけないのか」「デザイナーベイビー」など具体的な五つのテーマに分け、班を作って夏休み中にある程度調べてくることにしました。

二学期に、班ごとに調べてきた内容をクラスに発表し、全員で話し合いをしました。なので、今回のオープンデイの模造紙はクラスみんなの意見の入ったすごく良いものになりました。テーマについて話し合っていると、生命の尊さや自分たちが今どれだけ恵まれた環境で育っているかを改めて感じることが出来ました。「生命」について話し合っていただけに時には重い話もありましたが、学級委員を中心に上手くクラスの意見がまとまったと思います。

オープンデイの準備の段階でちょっとしたトラブルはあったものの、立教では珍しい模造紙重視のちょっと斬新なクラス展示が出来上がりました。総合優勝には届かなかったけれど、お客様賞一位、模造紙賞二位と、欲しかった賞は取れたのではないかと思います。

当日クラス展示の出口の白板に設置した真っ白なマインドマップ。訪れたお客さんに自由に記入していってもらいましたが、それが徐々に埋まっていくように、クラスの団結が少しずつ感じられたオープンデイでした。

立教の大黒柱

高三―二　伊藤　菜七子

「高三といえば？」

「立教の大黒柱!!」

全員で叫んだその声は、どの学年にも負けていなかったと思う。受験生である私たちは後輩がオープンデイ準備で胸を弾ませている横で補習に取り組んだ。かつて一年前は自分たちも同じことをしていたはずなのに、一緒に参加できない悔しさに、心が折れそうになった人もいた。それを乗り越えて、オープンデイ二日前から高三は準備に合流し、それぞれの係ごとに活動を始めた。

私たちは、後輩に負けないくらい、準備に力を注いだ。廊下は自分の担当のポスターを貼る場所で取り合いになり、教室の内装はどこが一番豪華にできるかで燃え上がった。焼き鳥と唐揚げの係は雨の中ブースを設置したり、ソーラン節の練習をしたり。キッチン係はチーズケーキ作りとエプロン作り、そして会場設営と忙しかった。

私たち高三がしていたことは、クラス企画やフリープロジェクトなどのメインに比べれば、地味な脇役だったかもしれない。その通りだと思う。私たちはあくまで裏方であり、主役は後輩。

でも、私たちはそれだけでは終わらない。裏方は裏方なりに、全力を尽くす。なぜなら、全員が誰よりも負けず嫌いで、誰よりも立教が大好きだから。この思いはきっと、あと一ヶ月の立教での生活の終わりを迎えても、ずっと、永遠に、持ち続けていくのだろう。

毎年夏休みに行われる日英サイエンス・ワークショップは、今年で十年目を迎えました。これは、クリフトン科学トラストのアルボーン博士が主催し、共催団体としてケンブリッジ大学と立教英国学院が企画運営するものです。今年は、英国（ケンブリッジ大学）と日本（東北大学）の二箇所で行うことになりました。これにともない、東北でのワークショップに参加する英国人高校生を招き、出発前に少しでも日本のことを知ってもらうという趣旨で、立教英国学院にて Briefing Weekend（事前学習会）が開かれました。

リンネ研究所の宝

高二―一　鈴木　里紗

がちゃっ。パスコードがかけられている、分厚い、いかにも宝を隠し持っていそうなドアが開いた。これからすごいものが見られる予感に言葉では表しきれないほどの胸騒ぎがした。少し緊張しながら、ドアの中を覗いてみた。初めて空を飛ぶ飛行機を見た子供のように興奮して私は目を大きく見開いた。中はこじんまりとした小さな部屋でレザーで出来ているカバーの古い本が大切そうに並べられていた。ここに置いてある本はただ長い年月を生き延びただけではない。このリンネ研究所の存在価値を最も高いものとしている本であった。

リンネは十八世紀の生物学者で初めて二名法を用いた生物の仕組みを分かりやすく記した人だ。ここにあるのは実際リンネが自身の研究の為に使っていた本であったり、彼が書いた本の初版だったり、生物学を大きく変えていった考えが手書きで記されている本ばかりだ。案内して下さった女性は一つ一つの本を気をつけて私たちの為に取り出して開いて、丁寧に説明をしてくれた。最も古い本で十五世紀の植物の本も見せてくれた。それ以外にもリンネ研究所のフェロー（研究員）の名前が全て並んでいる本も見せてもらった。中から昭和天皇裕仁の名前が出てきたり、十八世紀リンネによって集められた蝶、魚、虫なども保管されていた。

もちろんこの日に行ったリンネ研究所ではそれ以外にも研究所自体の歴史、フェローであったダーヴィン、ウォレスの話も教わって、聞いていてとても楽しかったが、やはり最も感動したのはリンネが世に残していった本がある小さな部屋だ。まだまだ未熟な私でもこの一つの小さな部屋にある生物学の歴史、発展、そして一つの新しいアイデアの大切さが心の底まで伝わってきたからだ。また何よりも、リンネがただ教科書に載っている人物としてだけではなく、本当に実際存在していた新しい物を考え出した偉大な人として間近に感じられたからだ。

今までロンドンにはよくアウティングで行っていたが、この日に教わって感じたものとは全く比べ物にならない。これからのワークショップがとても楽しみだ。

Briefing Weekend

高二―二　小山田　薫

七月十一日、英国の高校生と先生方の約三十名が私達の学校にやってきた。東北でのサイエンス・ワークショップの事前研修を行うためだ。この日から三日間、私は彼らと寮生活を共にした。これほど多くの英国人と一緒に生活するのは初めてで、戸惑うこともあったが、この三日間を通して感じたことも多くあった。

一つは、自分から会話を始めることだ。初日に英国の高校生が立教に到着し、寮や校内を案内していたときのこと。私は自分から話しかけることが出来なかった。話しかけようと努力はするのだが、どうしても言葉が詰まってしまう。打ち解けた後は、会話を続けることが出来るのに、初対面だと上手く話せない。このギャップをもどかしく感じると同時に悔しかった。英語でのコミュニケーション不足というのもあるが、一番の原因は、最初に何から話していいのか分からないからだと思う。つい難しく考えてしまうのが私の癖である。しかし、簡単な文のほうが尋ねやすく、相手も答えやすい。「兄弟はいるの？」「得意な科目は何？」など中学一年生で習うような文章でも十分会話は弾むのだ。これは、相手が日本人であっても同じことである。そのことに気づき、サイエンス・ワークショップ本番では同じ後悔は繰り返さないと決めた。

もう一つは、日本についての知識だ。今回の事前研修のために、私たちは日本について紹介するパンフレットとプレゼンテーションを作った。その際、私は意外と日本について知らないと実感した。インターネットで調べて、初めて分かったことも多い。普段、当たり前に感じている「日本人は会話のときのジェスチャーが少ない」「すみませんには様々な意味がある」など、英国人に尋ねられてから意識するようになった日本の文化もある。日本について教えるよりも、気付かされたことの方が多かったかもしれない。もう少し自分の住む国や地域のことを知ろう、と思う良いきっかけなった。

そして最も大切だと思ったこと。それは、意見を持ち発言することだ。英国の高校生のディベートに参加する機会があったのだが、皆、途切れることなく発言をし、自分の意見を伝えていた。これは私にとって新鮮だった。よく日本人は『意見を言わない』というイメージを持たれている。私も「〇〇と××、どっちにする？」と聞かれたら「どっちでもいいよ」と答えることが多い。しかし、彼らのディベートを見ていると、曖昧な返事をしている人は一人もいなかった。私には、皆、自分の意見や発言に自信と責任を持っているように思え、その姿がやけに眩しく見えた。今後は、物事をしっかりと捉え考える、自分の意見を相手に伝える、この二つを心がけようと思う。

新たな気付きをすることができた三日間は、私自身を大きく成長させ、とても貴重で充実したものになった。サイエンス・ワークショップ本番で、どれくらい力を発揮できるか楽しみだ。

サイエンス・ワークショップに参加して

高二―一　沼澤　芽生

夏休み、楽しみにしていたサイエンス・ワークショップに参加した。サイエンス・ワークショップとは、世界トップクラスであるケンブリッジ大学の様々な分野の研究室にお邪魔して、研究を体験するものである。日本人と英国人の生徒がそれぞれ二十人程度参加するため、文化交流の場にもなる。私はgenetic、遺伝についての研究に、英国人、日本人二人ずつの四人で参加した。

genetic の建物の中には研究内容によって十ほどのチームがある。そのなかで、ショウジョウバエを使って細胞分裂を観察しているチームに私は参加させていただいた。そこでは日本人の方がトップを務めていて、他にイタリア、ドイツ、シンガポールの方で成り立っている、国際色豊かなチームだ。私達四人が体験させてもらったテーマは、ハエの脳（生体内）と培養細胞（生体外）の細胞分裂を可視化すること。一台千七百万円する特殊な顕微鏡で、中心体、DNAなどを観察する。

まず、ハエの幼虫の脳を取り出すことに挑戦した。見たことのない細さのピンセットを使い、直径およそ三ミリメートルのハエの幼虫を顕微鏡を見ながら二つにちぎった。その後小腸などの、口と脳以外の器官を取り除く。ここまで細かい作業はしたことがなくて、目が痛くなった。初めの一匹目は上手くいかず、とても自分がこの作業を成功させられる気がしなかったが、何匹か作業していくうちに、コツをつかみできるようになってきた。研究室ではこの作業は一番基本のステップだ。毎日こんなに細かい作業をしているのだと思うと、研究者は忍耐強さが必要だと思う。細いピンセット、高性能の顕微鏡、使い捨てのピペットなど見たことない器具を多く使えて、楽しかった。

細胞分裂を可視化するにはいくつか段階をふむ必要がある。まず、観察したいDNAや中心体などは透明で目に見えないため、色をつけたい。そのために、紫外線をあてると反射して色がつく、ウサギやネズミの抗体をそれらにくっつける。何度も細胞を洗ったり、抗体をつけたりしながらようやく観察できた細胞分裂はとても美しかった。染色体はもちろん中心体や細胞骨格まで、赤や青の色がつき分裂の過程をとても詳しく見ることができた。

このチームは、細胞の分化の長さの違いを調べているそうだ（説明が複雑で詳しくは分からなかった）。それがどういうことに役に立つのか聞くと、普段「これはこれに役に立つ」と意識しながら調べることはない、と言われた。けれど強いていうならば、それはガンの治療法に役立つ可能性もあるし、他のことに使えるかもしれない、と言っていた。私は教えられることに慣れすぎていて、研究者の様に分からないことを自ら調べていくことは初めてで、難しさを感じた。と同時に、知らないことを知ろうとする、本来あるべき勉強の仕方を学ぶことができた。

genetic のチームのメンバーは先ほど触れた様に、様々な国から来ているがとても仲が良かった。昼食はいつもみんなで原っぱで食べて、最後の日の私達の夕食にはチーム全員で参加してくださった。国籍の壁はこれっぽっちもないチームを見て、とても嬉しかった。私は英語が難しくて多くは話せなかったけれど、温かく迎えて教えてくださったチームの皆さんに心から感謝した。

私がこの経験から得たもので最も大きなことは、知的刺激を多く受けられたこと。一緒に参加した英国人や京都の生徒、自分と同じ年齢でもバイリンガルの通訳さん、研究所の先生、大学の教授……。世界トップクラスのケンブリッジ大学だからこその多くの優秀な方達に一週間囲まれて、自分の無知が恥ずかしかった。今まで知らないことを恥ずかしいと感じたことは一度もなかったため、自分でも初めての感情に驚いている。もっと様々な分野のことを知りたいと思えて、多くの本を読みたいと終わってから強く思っている。ワークショップで出会った方で、飛び級でケンブリッジ大学の医学部に入学したという方がいるのだが、彼が「たくさん勉強したんですか」と聞かれて、「知りたいことを調べただけ」と答えているのを聞いて、勉強は本来そうあるものだよな、と納得した。そして私はその本来あるべき勉強の仕方の、最初のステップに立てたと思う。知りたい、と思えたから。多くの人に出会って、科学だけでなく、知的好奇心を刺激されたことが一番貴重なことだった。

高等部三年アウティング

高校三年生、学院生活最後のアウティングはロンドン。今年は予約の都合で二回に分けて行くことになりました。

一回目は十月十日（金）、グループ行動が中心で、ロンドンで昼食を食べるところから始まりました。急ぎ足で観光名所をめぐるグループ、のんびりショッピングを楽しむグループ、ひたすら食べまくるグループとさまざまです。最後のロンドンを楽しんでやろうと、それぞれのグループは前日からああでもないこうでもないと計画を立てていました。アウティングやホームステイで何度も訪れたロンドン、計画なら任せてといった調子です。自由時間を無駄にすまいとロンドンを文字通り「駆け巡った」班もあったとか。「あんなに走ったのは生まれて初めて！」と、疲れたけれど満足そうな顔を見せていました。

昼食後、最初の集合は大観覧車、ロンドンアイ。この日は十月のロンドンにしては珍しくいい天気で、予約はしてあったものの順番待ちは長蛇の列。他愛のない話で盛り上がりながら順番を待っていると、いよいよロンドンの街並みを一望できる空中へ。一つのカプセルは三十人乗りなので、贅沢に一クラスで一つ貸切です。三百六十度大迫力のパノラマに、生徒の間から自然と歓声がこぼれます。

「ヒースロー空港はどこかな？」「あの建物、去年の夏に行ったな」これまでの思い出を振り返りながらロンドンの街並みを一望。十八歳になっても素直に感動してくれるのは嬉しいもの。満面の笑みで記念写真を撮りました。

夜は皆でミュージカル、『オペラ座の怪人』を鑑賞。演目はもちろん全て英語ですが、ストーリーを理解できるあたりはさすが高三生。内容には賛否両論、昨年見た「レ・ミゼラブル」と比較しながら、「あそこのセットは……」「いや、あの演出が……」などと、帰りのバス内は白熱の論議が繰り広げられていました。みんながすばらしいミュージカルの世界に浸り、ロンドンを巡った疲れなんてなんのその、帰りは二時間にわたって話はやみませんでした。

二回目は十月二十九日（水）の国会議事堂見学。あの有名なロンドンの目玉、ビッグ・ベンを擁する国会議事堂内部に入れる貴重な機会です。イギリスで育った身として、イギリスの政治を理解していなければ大学で笑われてしまいます。ガイドはもちろん英語。聞き慣れない政治用語に真剣に耳を傾けていました。

世界史を学習している生徒にとっては、勉強した歴史が目の前に現れる機会。ガイドさんの話は、一〇六六年のノルマンディー公ウィリアムによるノルマン・コンクエストから始まり、一八三四年の大火によって焼け落ちてからの国会議事堂の再建、第二次世界大戦、その後から今に至るまでの話……。建物の話から政治の歴史まで、ちょっとした小話も交えながら話してくれました。

今回は下院が閉まっていたので、上院のみの見学でした。上院は赤と金、下院は緑と黄の色を基調とした部屋になっています。豪華な金色の装飾に赤色のソファはさすが貴族院といった豪華さでした。見学の道すがら、テーブルを囲んで話し込む上院議員の姿も目にすることができ、イギリスの政治を身近に感じたひと時となりました。

その日の昼食はクラスメイトと行く最後のロンドン。指示は無かったのですが、クラス全員で食べることを事前に決めていたそうです。幹事は大変でしたが、予約から注文まで自分たちでこなしていました。いつの間にか、こんなにも頼もしくなっていたのですね。

二日間にわたる外出によって学院生活最後のロンドンを満喫した高三生でした。

ノスタルジー

高三―二　太田代　真菜

その日は朝から雨が降ったり晴れたりと不安定な天気だったが、ロンドン・アイに乗った時はまぶしいくらいに晴れた。あの高さだからこそ見える、三六〇度に広がるロンドンの景色には胸を打たれた。それと同時に、次にこの景色を見られるのはいつだろうか、と切なくなった。

私はこの夏休みまでロンドン在住だった。そのため、いつもロンドンへアウティングに行っても、「また家に帰れば来ることができる」と思っていて希少価値はあまりなかった。

この夏、日本に本帰国をした私の家族はすぐにロンドンシックになった。日本は便利で生活しやすい。だが、緑の多さ、伝統ある建物が立ち並ぶロンドンの街並み、空気、におい……今まで何とも思っていなかったものが、突如思い出と化し、故郷は日本であるはずなのに、イギリスへのノスタルジーを感じた。

そのため、久々にロンドンを訪れることのできた今回のアウティングは今までと何か違うものがあった。休みになればいつも来ていたあの場所、あのお店には、今日行ったら次はいつ来ることができるのだろうか。そんな気持ちが一日中頭の中に過ぎった。友達も同じようなことを思っていたのか、思い出を形にするためにいつもより多く写真を撮っていた気がした。

そんなアウティングの締めくくりは、「オペラ座の怪人」のミュージカルだった。観たのは初めてだったが、物語はだいたい知っていたので楽しめた。そして何より演出がすごかった。あの狭い劇場でシャンデリアが落下するシーンや怪人が舞台の上から降りてくるシーンなどは、ほかのミュージカルより迫力があった。こうして気軽に芸術に触れられるのもイギリスの良い所である。

一日は信じられないほどあっという間に過ぎた。純粋に楽しかった。そして、私はまたロンドンに戻ってくる、そう強く感じた一日だった。

オックスフォード

高二―一　粟屋　柊

僕がオックスフォードへのアウティングを通して一番印象的だったのは、アインシュタイン博物館です。僕は理系なので特にこの博物館に置いてあるようなものに興味がありました。中でも一番感動したのはアインシュタインのブラックボードという、アインシュタインが昔、宇宙の膨張について考察した数式が書かれている黒板です。僕は高校一年の時に宇宙に興味を持ち、ネットや本からよく物理学に関することを調べていました。特に記憶に残っているのが、アインシュタインの相対性理論でした。そんなアインシュタインの自筆を見たときは、鳥肌ものでした。

そこからはアインシュタインがどんな気持ちでこの数式を書いていたのか伝わってくるようでした。この数式を見て、僕もこんな風に宇宙のあり方とか、そんな深いことをじっくり考えて、単純かつ明確な唯一つの数式を自分の手で導けるようになりたいなと感じました。

また、同じ部屋にあった世界最初の地球儀にも感動しました。日本の北海道がなかったりとある程度の誤差はあったものの、人工衛星がなかったり科学の発展が乏しい時にあそこまで正確な地球儀を作ることができたことには感動しました。

僕もあんな風に、世界で「最初の」なんて言われるものを想像できるアバンギャルドな人になりたいなと思いました。

リーズキャッスルに行って

小六　吉岡　美緒

私は、今回のアウティングでリーズキャッスルというお城に行きました。このお城は、すべての季節を通して素晴らしく、英国内で最もロマンティックな、また、歴史的な建造物と呼ばれるほど外観が綺麗なお城で、しかも、ヘンリー八世が最初に結婚した人と過ごした宮殿としても知られている程、有名らしいです。

私の中で一番印象に残ったのは、チャペルでした。立教と違った所は、十字架ではなくて崇拝のタペストリーが正面に飾ってあるという所とチャプレンのすわる場所がないという所です。同じ所は、聖歌をひくためのオルガンがある所と、フラワーアレンジメントの人がニューホールに置くペディスタル（花台）があった所でした。立教よりは、広さは小さいけれど、ほぼすべて木で作られていて私にはドールハウスの様に見えました。もう一つ見ていて驚いたのは、夫人の寝室のランプが全て鳥の形になっていた所でした。他にも、いたるところに、鳥の置き物や絵があってびっくりしました。ブラックスワンをイギリスに初めて持ってきて飼い始めたほどの鳥好きらしいです。

今回のアウティングは、ブレナム宮殿より小さかったけど歴史的には重要な建物だと見てから思いました。池にはたくさん鳥が泳いでいて、時間の流れが少しゆっくり感じられるような宮殿でした。

歴史を感じて

高一―一　楢岡　詩英梨

今回、私はアウティングでケンブリッジへ行った。立教英国学院に入学して早三年が過ぎ、高一になった私にとって毎年恒例のケンブリッジへのアウティングは憧れの一つであった。歴史のある古き良き街並みに由緒正しいケンブリッジ大学はイギリスにいるなら是非見たいと思っていたからだ。中三の三学期にカンタベリーへ行った時も大聖堂のみならず、街並みに感動したことを覚えている。今回はどのような雰囲気なのか、どんなものがあるのか、行く前から私は興奮していた。

そして迎えたアウティング当日。立教から二時間半以上の移動で疲れていた私の目の前に想像以上の景色が広がった。レンガ造りの建物一つ一つが美しく、実際にお店や大学として使われているとは思えなかった。ケンブリッジツアーで紹介された所はどこも私の期待以上に素晴らしい物だった。中でもひときわ印象に残ったのはやはりキングス・カレッジの礼拝堂であった。私は日本でも日曜日に礼拝に行くが、毎週こんな礼拝堂で礼拝をしたいと切実に思った。一年前、カンタベリー大聖堂へ行ったが、そことはまた違った素晴らしさを感じて、いつまでもそこに居られるような気がした。夕方の礼拝にも参加しようか迷ったが、結局参加しなかったので今とても後悔している。有名なクワイアーも一度でいいから見てみたいと思う。

私は今回のアウティングを通してイギリスの古き良き文化の素晴らしさを再確認できた。イギリスで生活を送っているがまだ私はイギリスを知らない。これからもイギリスの文化や歴史を学んでいきたい。

【2 学期の行事】

9 月 7 日	始業礼拝
9 月 8 日	高等部実力テスト
9 月 19 日	個人写真、卒業学年クラス写真撮影
9 月 20 日	サイエンスワークショップ報告会
9 月 25 日	午後ブレイク
9 月 27 日	スカウトとの交流
	ロンドン日本人学校文化祭
9 月 28 日	第 34 回因数分解コンクール
10 月 5 日	生徒会主催 Guildford Shopping
10 月 7 日	全校写真撮影
10 月 10 日	アウティング
10 月 11 日	実用英語技能検定一次試験（1 級、準 1 級）
10 月 12 日	実用英語技能検定一次試験（2 級以下）
	Apple Day 外出
10 月 24 日	教室、ドミトリー移動
10 月 25 日～11 月 1 日	オープンデイ準備期間
10 月 29 日	高等部 3 年生　国会見学外出
11 月 2 日	オープンデイ
11 月 3 日	オープンデイ片付け、オープンデイ閉会式
11 月 5 日	全校歯科検診
11 月 9 日	実用英語能力試験二次試験（1～3 級）
	サッカー観戦外出
11 月 22 日	CAMBRIDGE 英検 KET、PET
11 月 25 日	CAMBRIDGE 英検 FCE
11 月 26 日～12 月 1 日	期末考査
12 月 2、3 日	答案返却
12 月 4 日	スクールコンサート
12 月 5 日	生徒会主催クリスマスコンサート・高 3 生を送る会
	ELMBRIDGE VILLAGE キャロリング
	クリスマス礼拝
12 月 6 日	終業礼拝　生徒帰宅
12 月 13、14 日	中学部・高等部入学試験 A 日程
	中学部 3 年生帰宅

Thomas Hardye Rikkyo Exchange Programme

8th November - 12th November, 2014

～現地校との短期交換留学体験～

十一月八日（土）～十二日（水）までの五日間、Thomas Hardye School との短期交換留学が立教英国学院で行われました。短期交換留学では、留学生一名につき立教英国学院の生徒が一名ついてバディ（パートナー）を務めます。今回は五名の男子生徒が来校し、高等部二年の生徒三名、高等部一年の生徒二名がバディとなり、五日間生活を共にしました。

忙しく過ぎる毎日でしたが、食事の時間は毎日会話が尽きることなく盛り上がっていました。この五日間、留学生とバディが一緒に昼食と夕食をとっており、食事の場はお互いの言語を教えあう場となっていました。食事でよく使う、「水」や「パン」、「分ける」などの日本語は留学生もいち早く覚え、積極的に使っており、その他、「今日のメニューは好き？」「いつもどんなものを食べているの？」など、食事を通してお互いのことをより深く知っていく機会になりました。毎晩夕食後は映画鑑賞やスポーツを通して留学生とバディが交流する時間でした。「今日の夕食後は何しようか？」と、予定を立てるために話し合うことも食事中の楽しみの一つだったようです。

めまぐるしい毎日を過ごしている間に、短期交換留学はあっという間に過ぎてしまいました。立教生のバディたちは普段以上に英語を使う日々で疲れもありましたが、それ以上に同年代の英国人と話題を共有し交流することが楽しそうに見えました。

次は来年三月に、立教生が Thomas Hardye School を訪れ、約一週間短期留学を行います。また一月には、Millais School から十名の女子生徒が来校する予定です。さまざまなことを経験して実りある留学になってくれることを期待しています。

交換留学を終えて

高二―一　宇佐美　賢志

人見知りな僕にとって、とても大きなチャレンジだった。突然会った人と一週間も一緒に過ごすなど、昔の自分では考えられなかった。

チャレンジしようと思ったきっかけは、イギリスの同じ年頃の生徒がどんな風なのかとても気になったから。これからの自分の将来を考えてゆく上でなにかヒントがえられるのではないかと思い、この交換留学に参加しようと決めたのである。

もちろん、語学の学習のためでもある。実際にネイティブスピーカーとコミュニケーションをとるということは自分の英語の習熟度を上げ、自分の体に英語というものを覚えさせる上でとても大きな役割を果たしたように思える。

交換留学において大切なこと、それは信頼関係の構築である。異文化の中で何もわからず生活するのだ。自分の相方への信頼は絶対的に必要不可欠となってくる。人間、突然会ってもすぐにうまくゆくものでもない。流れをつくって、徐々に会話量を増やし、相手について情報を集める。積み重ねてゆくことが大事なのである。

しかし、一つ気をつけねばならないこと、それは、相手の生活習慣、文化、違いを受け入れ、いかにこの普段と違う生活の中で困ることのないように暮らせるかに気をくばることである。とても骨の折れる作業だが、改めて自分達の生活がどのようなものであるのか、再認識することができた。自分達が当たり前のようにやっていること、行動、考え方について自分自身を顧みる良い機会であった。

この交換留学を通して感じたことが一つある。今自分達のやっていること、そのすべてが正しいわけではないのかもしれないということだ。バディの子に学校生活の違いをきいた。全く違ったものだと話していたのを覚えている。国が違えばカリキュラムも、教育についての捉え方も違うかもしれない。だがどちらの方が正しいなどということはなく、それぞれにそれぞれのメリット、デメリットがあると思う。それぞれの良いところを採り入れてゆくのがより良い方法ではないかと思った。

これは、日本、イギリス両文化においても言えることである。違いを理解し受け入れ、協力することによってより良いものへと昇華させてゆく。今私達は世界各国の国際協調性が重視される時代に生きている。異文化を受け入れる、これこそがまさに必要とされているものではないだろうか。

スカウト隊がやってきた！

九月二十七日の土曜日、立教英国学院にスカウト隊がやってきました。彼らは来年の夏に山口県で行われる第二十三回世界スカウトジャンボリーに出席する選ばれしイギリスのメンバー達。日本訪問前に、彼らに日本のことを少しでも知ってもらおうと、今回我が校の高校一年生と交流の機会が設けられました。いつもなら午前中には授業のある土曜日ですが、この日は一日かけてスカウト隊と楽しい交流の時間を過ごすことが出来ました。

最初の自己紹介はお互い少し緊張気味でしたが、アイスブレイクで Stuck in the mud（日本でいう氷鬼）をすると一気に距離が縮まりました。その後はグループに分かれて色々なアクティビティに挑戦しました。

まずはロープと木だけで鳥居を作るアクティビティ。普段からキャンプなどでロープの扱いに慣れているスカウト隊のメンバーや大人のリーダーからロープの結び方や木の組み方を教わりました。このようなアクティビティをスカウトでは Pioneering というそうです。未開拓の地でも生きていけるような術を Pioneering では学ぶわけです。

次にチームワークが要求されるゲームをしました。円にしたロープ一本をみんなで引っぱり、その上を一人が歩く遊びやボールを使った遊びなどです。みんな大はしゃぎで（童心に帰って？）このゲームに臨みました。人が揃えば、シンプルな道具でこんなにも楽しい遊びができるのかと感心しました。

午前中のプログラムを終えると、この日は特別に外の芝生の上で昼食を食べました。写真を撮ったり話を深めたりして、いつもとは違った土曜日の昼食を美味しくいただくことができました。

午後は、まずロープと木で担架を作るアクティビティをしました。完成した担架の上に人をのせて、チームレースも行いました。チームによっては途中で担架が壊れる所も……。良い思い出となりました。

そして最後に立教生からスカウト隊へ、来年の日本訪問に備えて、日本について英語でプレゼンテーションを行いました。この日のために準備をしてきた、日本の食べ物や電車の乗り方、お風呂の入り方など、同年齢の生徒たちの視点から見た日本紹介に、スカウト隊のメンバーは興味津々で聞き入っていました。日本文化について詳しく書かれた手作りの冊子をもらったスカウト隊のメンバーは「来日の際に必ず持っていく！」と喜んでいました。

別れの前のお茶の時間にはスカウト隊と立教生がお互いにお土産を交換しました。スカウト隊からもらったバンドには日本語で「仲間」と書いてありました。

良い刺激となる時間を彼らと過ごすことができ、スカウトとの交流は思い出に残るイベントとなりました。今回出会った「仲間」達が来年日本でよい時間を過ごすことが出来ますように。

りんごのおまつり、アップル・デイ

10 月の第 2 日曜日。今年も近隣の村であるラジウィックでアップルデイという催しがありました。その名のとおり、アップルデイはりんごのお祭り。会場に着くと大量のりんごをその場でつぶし、ジュースにしている様子が目に入ります。芝生のグラウンドにはいくつかテントが建っており、そこでは手作りのお菓子や雑貨、村の農場で作っているチーズなどが売られています。特に人気だったのはりんごあめ。日本の縁日を思い出し、「お祭りに来たのだ」という気持ちになりました。日本でもこの季節は収穫祭があるところが多いのではないでしょうか。収穫に感謝するというのは、国を超えて共通する習慣なのですね。

アップルデイ
高 3―2　藤井　信亮

僕は今回初めてアップルデイに行った。一昨年と昨年は部活動や英検で行くことができなかったので、今年こそはと心に決めていた。話には聞いていたが、行ってみると、それは本当に地域のお祭りであった。芝生の広場に出店があるだけで、なんだか日本に住んでいた頃の三丁目祭りを思い出した。ここで二時間も楽しめるのかと疑問に思った。しかし、豚肉を食べたりハンバーガーを食べたりしているうちに考えが変わった。リンゴジュースの試飲を勧めてくるおじさんや、手作りの人形や鞄を売っているおばさんを見て、人と人との距離が近いお祭りの良さを感じることができたからである。

走り回っているちびっ子や、お肉を貰いたそうにしている犬を見て、とても心が癒された。そして、ホストファミリーと会うこともできた。手作りの鞄を売っているおばさんが話しかけてきたと思えば、以前お世話になったホストファミリーのレベッカさんであった。最後には顔にスパイダーマンのペイントをしてもらった。

本当に今回アップルデイに行くことができてよかったと思う。おいしいものを食べることができたし、とても楽しかった。一緒に楽しんでくれた友人たちにもありがとうと言いたい。立教での思い出がまたひとつ増えた。

p.12　解答　（1）$4x^2y^2(4x^2y^2-2xy+1)$　（2）$(x+1007)(x-2)$　（3）$(xy-1)(xz-x-y)$　（4）$(x+19)(x-2)(x-53)$

立教生の夏休み

世界各地に住んでいる立教の生徒たち。それぞれの夏休みの様子を紹介します。

夏休み

高二―一　小林　奈乃子

フランスでシャガール美術館に行った。シャガールの絵画は、美術の教科書などで数点見たことがあったが、女の人や羊が空を飛んでいる、夢見がちな作品を描く芸術家というイメージしか持っていなかった。

美術館では音声ガイドを聞きながら絵画を眺め、家族と感想を言い合った。ガイドを聞いて、ただ絵を見るだけでは分からないその絵に込められた「意味」や「想い」を知ることが出来た。ユダヤ人の迫害、旧約聖書のメッセージや愛する人を失った悲しみ。テーマは様々だが、一枚のキャンバスの中に、シャガールの強い想いや深い意味が込められていた。

展示されていた中で特に多かったのは、ユダヤ人の迫害の様子が描かれたものだったように思う。シャガール自身がユダヤ人であり、パリやモスクワを点々としながらも故郷への愛と慈しみを持ち続けた彼の姿を知ることが出来た。

私が見た中で一番印象に残ったのは、「楽園」という作品だ。薄いブルーとグリーンが美しいこの作品は、神が与えた楽園で過ごすアダムとイヴ、動物たちが描かれている。咲き乱れる花や不思議な色合いの動物たちはにぎやかだが、アダムとイヴは手に禁断の果実を持っていて、上から天使がそれをじっと見つめている。寒色系でまとめられた画面は少し淋しげで、楽園追放という二人の運命を暗示しているように見えた。

この美術館に行って、私のシャガールの絵画へのイメージが大きく変わった。今まで持っていた幻想的で漠然としているイメージが払拭され、冷静で現実的な目線で描かれているという印象を受けるようになった。時代背景や描かれたテーマを知ることでこれほどまでに受ける印象が変わるのだと分かり、とても驚いたが、貴重な体験が出来たと思う。

チョコの香りのする場所

高二―二　竹内　貫太

今回の夏休み、私は最初の土・日曜日で、ベルギーのブリュッセルとブルージュを訪れました。

私が驚いたことは、チョコレート屋の多さです。有名な観光スポットには必ずといっていいほど何軒ものチョコレート屋があり、まわりには甘い香りがしていました。

チョコレートの原料であるカカオは南米が産地であり、ベルギーでは採れないのに、なぜベルギーはチョコレートが有名なのだろうと思いました。そこで少し調べてみたところ、鍵を握っていたのはスペインでした。

アステカ帝国が滅び、スペインの植民地になったことで、アステカの王族や上層階級が薬や特別な飲み物として飲んでいたカカオ飲料が、スペイン本国にも伝わりました。今のオランダ南部やベルギー西部、つまりフランドル地方はその頃スペインが統治していたので、彼らによってベルギーにカカオが持ち込まれたようです。

では、どうしてオランダではなく、ベルギーのチョコレートが有名になったのか。それはベルギー人とオランダ人のおいしいものに対するこだわりの違いだと思います。今回旅行してベルギーの料理は、オランダと比べて圧倒的においしかったためです。ベルギー人のおいしいものへの探究心が、今のベルギーチョコレートを作ったのだと思いました。

ペルー旅行記

高二―一　池田　匠

この夏休み、南米ペルーの山奥にあるインカ帝国の遺跡、マチュピチュを訪れた。遺跡の入り口から急斜面の山道を登っていくと、写真で見たことのある同じ景色が目の前に広がった。

標高二四〇〇メートルの山頂に築かれ、ふもとからは全く見えないので、謎の空中都市として、新・世界七不思議の一つに数えられている。

マチュピチュの遺跡はそれぞれの石がきれいに合致するように切り出されている。これは、見た目の美しさだけではないらしい。ペルーは、地震が起きやすい国で地震の時にわずかに振動しながら動き、その後、元の位置にしっかりと戻るという。また遺跡内には星を映して天体観測をしていたとされる水盤や、冬至や夏至の太陽の位置を意識して作られたものがたくさんあり、インカの人々の知恵と技術の高さに驚いた。

僕は今までヨーロッパや南米の世界遺産をたくさん見てきたが、このマチュピチュの遺跡を目の当たりにした時の感動は格別だった。空に近いところへ都市を築いたのは、スペインの征服者から逃れるためだったのか。それとも、太陽の神に近づくためだったのか。

文字を使う文化のなかったインカ帝国の遺跡は多くの謎を残し、そこがまた人々を魅了するのかもしれない。

グローバライゼーションの功罪

高二―二　平位　正虎

閑散とした商品棚に並ぶ、残り少ない食材などを競い合って買い求める……ソ連時代のロシアの日常的な光景である。その後資本主義のロシアになったことで、物は商品棚を埋め尽くすようになったが、最近になって少しずつ棚が再び閑散とした状態になってきている。ロシアが決議した「EU及び米国等からの一部食料品輸入停止措置」における結果である。

事の発端はウクライナのヤヌコーヴィッチ政権の崩壊。ここでロシアの軍事的に重要な拠点であるウクライナが親EU政権となる場合、ロシアの影響力が限定的となってしまう。そのため、戦略上重要な地理的条件下にあるクリミア半島を占領。これに対し、欧米が非難し制裁を行い、ロシアもこれに応じる形で欧米に制裁を科し、制裁合戦となった。

物不足は一時期にくらべて減ってきたが、未だにレタスやブロッコリー等の農作物、サーモン等の海産物はなく、輸入製品の多くは姿を消した。イタリアン・レストランのサラダは十種類ほどある中、二種類しか注文できなかった。スーパーにある生産国を示す国旗からは、米国やスペイン、オランダのそれが姿を消し、ロシアやトルコ、チリの国旗のみになってしまった。制裁に苦しんでいるのは欧米の国民のみならず、ロシアの国民もまた同様である。

グローバライゼーションの進む世界。今では自国で世界中の物を見つけることができる。ロシアはこの流れに逆行するような行動をとった結果、市民生活に予想以上の影響を及ぼすことになった。これは現在の日本への教訓となるだろう。食物自給率が先進国の中でも最低レベルである日本で、もし同様の事が起こるとその影響はロシアの比ではないだろう。現代社会の抱える新たな課題の一つである。

教科レポート

国語科より
～読書感想文～

年に一、二回休暇中に国語科より読書感想文の課題を出しています。今年の校内読書感想文の金賞に選ばれた作品は、国語科全員が納得する程、特に優れたものでした。金賞に選ばれた二作品を紹介します。

「良い人と悪い人」

中一　鮒田　忠治

僕が『坊っちゃん』と出会えたのは、三年生です。最初は読む気がなくて、部屋のすみから取り出した難しい本でしたが、五、六年生と時間をおいてから読むと意味が分かってくるようになり、中一になると筆者、夏目漱石の描きたかったことも読み取れるようになったかな、と思います。

『坊っちゃん』を読んで漱石は、良い人、悪い人を描きたかったのかな、と思いました。なぜかというと、親ゆずりの無鉄砲で、素直な坊っちゃん、それとは反対に表はやさしいが、裏はずるがしこい赤シャツなどと、はっきりといい人、悪い人を描いているからです。

では、良い人と悪い人との違いは何なのでしょうか？

僕から見ると、まず良い人は、調子のいいことを言わず、うそをついたり、ごまかしたりを嫌う人です。次に悪い人は、表面は良い人だけれども、調子の良い事を言っているだけで、それがばれたらごまかしたり、無かったように知らんふりをしている人です。

ここから出る問いは、まず初めに、なぜ良い人はうそをつくのが嫌いなのか？次に、人間は良い人と悪い人に分けられるのか？　最後に、どうして悪い人は調子良くするのか？

初めの問いは、良い人はうそをつくと後で悔いたり、自分の信らいを失ったりするのをよく知っているからだと思います。

次の問いは、表面上だけだと、流石にわかりませんが、中をよくみてみると、分けられるような気がします。

これは僕の小学生のころの経験ですが、ある時とても仲の良かった友達に家の鍵をかくされました。別にけんかする理由もなかったのに、一番信らいの出来る人から裏切られるのは、とても悲しいことでした。

さて、では最後の問いは、多分相手から信らいを得たいだとか、相手と上手に関わりたい、という思いが、つい出てしまうからだと思います。誰だって、最初から相手に嫌われたくないし、自分のことを尊敬してもらいたいと思います。なのでついつい調子の良いことを言ってしまい、結果的に信らいを失ってしまう、ということになってしまいます。

このように人との関わりを考えていくと、赤シャツのような人は良い人になりたい、という思いが強すぎるのであのような陰口や、裏でコソコソと悪事を働いてしまうのです。それとは逆に坊っちゃんみたいな人は、うそをついたり、調子の良いことばかり言っていると、ろくな事にならないし、正直に言いにくいことでもあえてきちんと言うことにより、結果的に得をするし、言われた相手も得をする、ということを分かっているので素直な人になれるのだと思います。

人生の分岐点。素直な坊っちゃん、悪事を働く赤シャツ、どちらになるか、一度考えてみることをおすすめします。

『斜陽』の恋と革命

高二―一　小林　奈乃子

「人間は恋と革命のために生まれてきたのだ。」

これは、この作品の主題となる文章のひとつです。

戦争が終わった昭和二十年、没落貴族となった主人公のかず子とその母は東京の家を売り、伊豆で暮らしていました。弟の直治も南国の戦地から帰ってきて、その弟を介して上原という男と知り合ったり、体調のすぐれない母親の看病などをしながら、かず子は穏やかな日々を過ごしていました。敗戦まで貴族として恵まれた生活をしてきたかず子でしたが、戦争を経験したこと、そして結核になってしまった母の死を前にして「私はこれから世間と争って行かなければならないのだ。」と確信します。

それから少しして、かず子の母親は亡くなってしまいます。私は最初、その後のかず子の行動にとても驚きました。母の死後、かず子は「いつまでも、悲しみに沈んではおれなかった。私には、是非とも、戦いとらねばならぬものがあった。」と、自身の恋を叶えるために、出会ってからずっと忘れられなかった上原のもとを訪ねて行くのです。愛する母親の死の悲しみにも浸っていられないほどのかず子の熱い思いが感じられる場面でしたが、もし私がこのときのかず子のような状況におかれたとしても、私なら母を失ったさみしさと悲しさで自分の恋愛のために行動する余裕はきっとないだろうと思いました。しかし読み返してみると、このときのかず子の心境は「私はいま、恋一つにすがらなければ、生きていけないのだ」とも記されており、かず子の上原への愛の大きさと、その思いにすがらなければ生きていけないほどに母親の死がショックだったこと、それだけかず子の母親への愛情が強かったことが現れている行動なのだと気づかされました。

恋と革命。それは、この作品の主人公であるかず子にとっての物語の主題なのだと思います。この作品の最後で、かず子はもう一つの革命を起こす決意をしています。お腹に宿った、不倫相手の上原との子供をたった一人で育てていくことです。かず子と上原はしだいに疎遠になってしまいました。それでもかず子は、恋しい人との子供を産み、シングルマザーとして育てていくことを決心するのです。

自分の家族も生まれてくる赤ちゃんの父親もいない中、一人で子供を育てることは私には想像もつかないほど大変なことだと思います。しかし彼女は、離れていった上原を責めることはありませんでした。この優しさが、かず子の心の強さを物語っていると思いました。そしてこの恋と革命のために生きようとするかず子の強さが、社会に進出し奮闘する現代の女性たちにも通ずる、『斜陽』という作品に込められたメッセージなのだと思います。

数学科より
～今年も因数分解コンクール！～

今年は例年よりも一週間早く、因数分解コンクールが開催されました。

例年よりも一割増し、難易度があがったのではないでしょうか。四枚から構成される問題冊子のうち、やさしいNo１の問題から引っかけ問題があちこちに。緊張して必死に解いているので、平常心の時ならば何でもない問題でも、うっかり勘違いして間違えてしまいそうでした。

「西暦の数が因数分解で発問される」というのも恒例です。

今年の２０１４は「２×１９×５３」でした。そして問題の中での、２０１４の登場頻度が高かった。

おまけに素因数分解だけで発問されるわけではない。他の数を使って、掛けて足して引いて２０１４が出るようになっていたりと、なかなか頭をひねることになりました。

毎年必死になって解くたびに、そして工夫をこらした問題の数々を解くたびに、「うわぁぁ、数学の先生たちってば！」と思いながら、先生方を心から称賛する思いが湧き上がるのです。言うまでもなく、問題は百題を本校の数学の先生方が作っています。No４に進むにつれて難易度は高くなるものの、No２やNo３から散見される、精緻に構築された問題たちは本当に見事としか言いようがありません。高校生らをはるかに超える人知と数学の美しさに脱帽、感動すら覚えます。

そして学期始めから（ひょっとすると夏休みから）黙々と学習を積み重ね、難易さまざまな問題をパッパと解き、百問六十分という体力勝負をもくぐり抜けて高得点をマークする生徒たちも見事です。

今年は例年よりもはるかに難易度が上がっていましたので、九十点台後半は登場しませんでしたが、高三理系生徒が九十四点を叩き出し、トップを飾りました。続く八十六点をマークした者には、やはり高三理系生徒たちが名を連ねていました。これに高二の生徒（理系・文系が一人ずつ）、高一からも八十五点に躍り出た生徒が一名登場しました。

因数分解コンクールは学習の済んでいる中三からの参加ですが、今年はなんと中二からも参戦していました。クラスの先生が初歩的な解き方を教えてくれ、四枚から構成される問題のうち、No１には挑戦し、それ以上に挑戦した女子生徒が四十点以上の得点をマークして、見事速報を飾っています。

速報に載らない生徒たちもずいぶん頑張っていました。去年から三十点以上点数を高めた生徒、私立文系ながら果敢に挑戦し、七十点以上をマークした生徒、個々の頑張りは速報だけに表れるものではありません。

ちょっと難易度があがった今年の因数分解コンクール。皆さんもトライしてみませんか？

因数分解に挑戦！

（１）$(2xy)^4-(2xy)^3+(2xy)^2$

（２）$x^2+1005x-2014$

（３）$x^2y(z-1)-x(y^2+z-1)+y$

（４）$x^3-36x^2-939x+2014$

※解答は９ページ

２学期　終業礼拝

12月６日。立教英国学院は第２学期終業礼拝の日を迎えました。

今日は高校３年生の“卒業の日”。高３生はみなきりっとした表情でまっすぐ前を向いています。ぴんと張った背筋には、後輩に何かを残したい、そんなメッセージがこもっているようでした。その背中には、それぞれの立教生活の思い出が詰まっている。でもそれだけではなくて、チャペルの中は、今日から始まる新しい人生への期待の気持ちで、エネルギーに満ち溢れていました。そのエネルギーを感じて、後輩たちもまた、大きな背中をまっすぐ見つめています。

担任の先生方からの式辞では、高３生の立教生活が振り返られ、温かい気持ちになりました。「ここにこれからもずっといたい。そんな気持ちがないといえば嘘になる。それでも、新しい人生に向かって、ここを飛び出していかなくてはいけない。」そんな決意の最後の一押しをするようなメッセージに、高３生の多くの目から涙がこぼれていました。

４月には、いつもと違うネクタイの色に、自分も、周りも、違和感を覚えていたかもしれません。でもいつのまにか、立教生であることを毎日少しずつ実践していく中で、そのネクタイは自分の一部になっていく。いつの間にか、青ネクタイが似合わなくなっていく。そして今日、今までで一番似合う赤ネクタイを締めた高３生が、それを外す時が来ました。

３学期からは、高校２年生がテーブルマスターやアコライトなど、高３生が務めていた仕事を引き継ぎます。３学期の始まる日、新しい立教に帰ってきた生徒たちはどんな顔をしているのでしょうか。